

# 周南市小地域別人口構造に関する予備的分析

河田正樹

## 1. はじめに

現在、日本は少子高齢化が進展している。これはわざわざ詳しく説明するまでもないことであり、徳山大学の所在する周南市もその例外ではない。周南市の人口<sup>1)</sup>をみると、2008年8月末現在、14歳以下が20,478人で人口の13.4%、65歳以上が37,645人で人口の24.6%となっている。2003年8月末現在では、14歳以下が21,617人で人口の13.8%、65歳以上が33,364人で人口の21.3%であったことから、少子高齢化の進展が見てとれる。

しかし、周南市でもその中の小地域をとりあげた場合、以前よりも子供の数が多くなるという逆の現象が起きている。徳山の中心地に近い桜馬場通2丁目などがその例であるが、この地域は2004年以降3棟のマンションが建設され、そこには100世帯以上が新たに入居している。そのため、2003年8月末時点で42人だった人口は2008年8月末には321人と約8倍に増加している。

この2時点の5歳階級データを用いて、人口ピラミッドを描いたのが下の図1、図2である。この2つの図を見比べると、この地区に流入してきたのは、

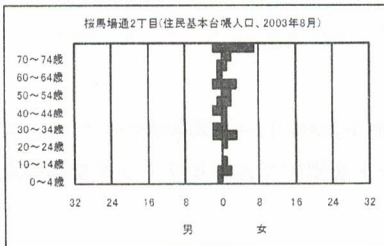


図1 桜馬場通2丁目人口ピラミッド  
(2003年8月末)

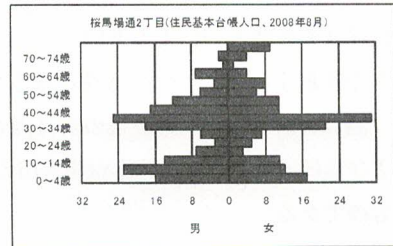


図2 桜馬場通2丁目人口ピラミッド  
(2008年8月末)

1) 住民基本台帳による人口である。以下、本稿では特に断わりのない限り、人口のデータに住民基本台帳による人口を用いる。

30歳から44歳の両親と、14歳以下の子どもが1人ないし2人というファミリーが多いということがいえよう。

では、このようなファミリーはどこから流入してきたのであろうか。近隣の市町などからも若干の流入が考えられるが、多くは市内での移動であると思われる<sup>2)</sup>。そうであるなら、反対にこのようなファミリー層が多く流出している地域はないであろうか。その結果、高齢化が急激に進んだり、将来の高齢化が予想される地域は存在するのだろうか。などのいくつかの疑問が思いつく。

本稿では、このような疑問の答えへの予備的分析として、30歳代後半コーホート（2008年8月末現在）の人口変動を記述してみた。以下、第2節では、周南市全体の人口構造の変化として、周南市では20歳前後での人口の純流出（流出－流入）が多いことに対し、30歳代では変化があまり大きくないことをあらわした。第3節では、30歳代後半コーホートの人口変動について、市が区分している各地区ごとでどのような相違があるかをあらわした。第4節では、より小地域である町丁字単位（〇〇町〇丁目単位）での、このコーホートの人口変動についてあらわした。第5節では、予備的分析のまとめと、この研究の利用可能性についての考察をおこなった。

## 2. 周南市全体の人口構造の変化

最初に周南市全体の人口構造を見てみよう。周南市の人口構造を見るとき、住民基本台帳人口による人口ピラミッドと、国勢調査人口による人口ピラミッドを比較すると、1つの特徴が見えてくる。

図3、図4は、一番最近の国勢調査である2005年の国勢調査のデータ、およびほぼ同時期の住民基本台帳人口のデータを用いて人口ピラミッドを描いたものである。

住民基本台帳人口は、周南市に住民登録されている人口を数えたもので、毎月末公表されている。この人口は日本人のみであり、外国人は外国人登録人口

2) これは筆者の伝え聞いたものであるが、後述する周南市全体の30歳代の人口変動のデータをみると、ある程度納得できるものである。

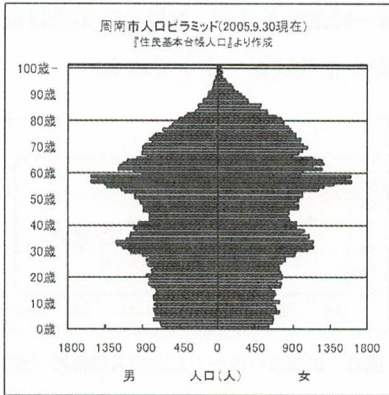


図3 周南市人口ピラミッド  
(2005.9.30現在)  
(住民基本台帳人口による)

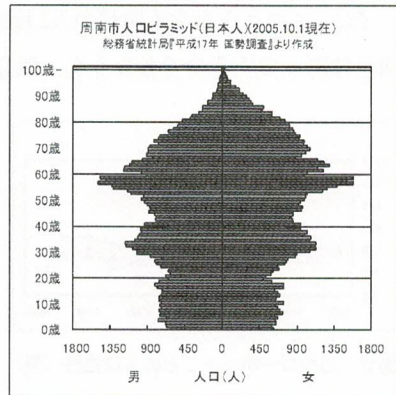


図4 周南市人口ピラミッド  
(2005.10.1現在)  
(国勢調査人口(日本人のみ)による)

によって把握される。

一方、国勢調査は、調査日時時点で周南市に住むすべての人が調査対象となる。外国人も調査対象であるが、このグラフでは、住民基本台帳人口との比較のため、日本人のみを用いている。

この2つのグラフは大体同じような形をしていて、周南市の場合、2005年当時50歳代後半の「団塊の世代」以上の人口に比べて、当時30歳代前半の「団塊ジュニア世代」やその下の世代の人口が少なくなっている。これは他の都市などへの流出によるものと考えられる。

その点については、この2つのグラフの相違点からも考察することができる。住民基本台帳人口と国勢調査人口の相違は、住民登録でとらえるか、現住地でとらえるかにある。すなわち住民票の移動をともなわない転居が、相違の主な原因となっている。

周南市の場合、国勢調査人口の人口ピラミッドでは、20歳前後の学生世代の人口がその前後の世代より少なくなっていることが見てとれる。これは、周南市に住民登録をしたまま、他市町に流出している人口が、他市町に住民登録をしたまま、周南市に流入している人口よりも多いことを意味している。

では、このような学生時代の人口流出は一時的なもので、学校を卒業後は周南市に戻ってくるのであろうか。残念ながらそれは違うようである。

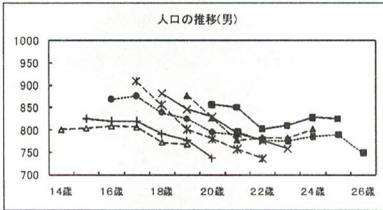


図5 出生コーホートごとの人口推移 (男)

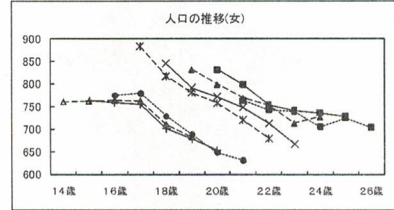


図6 出生コーホートごとの人口推移 (女)

図5、図6は、2008年8月末現在、19歳から26歳までの出生コーホートの人口推移を描いたものである。男女ともに18歳から23歳ぐらいまで右下がりで、その後はあまり変化がない。男性より女性のほうが下がり具合が急であり、純流出数(=流出数-流入数)が多いことがわかる。また、先ほどの国勢調査人口を用いた人口ピラミッドとの比較から考えると、現住地でとらえた場合には、18歳前後において、急激に人口が減り、その後の変化はあまり大きくないのではないかと推察される。

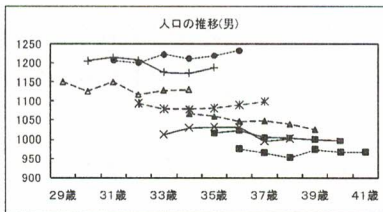


図7 出生コーホートごとの人口推移 (男)

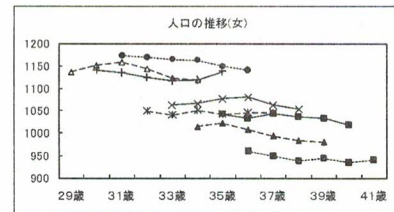


図8 出生コーホートごとの人口推移 (女)

図7、図8は30歳代前後の出生コーホートの人口推移である。これを見ると、20歳前後で大きく変動した人口は、30歳代では安定的な変化となることがいえよう。他市町への流出と他市町からの流入がほぼ同じであり、結果として大きな変動がないものと思われる。

これを考えると、周南市内のある地区において30歳代後半が増加したということは、市内の他地区から転居してきた可能性が高いといえよう。

### 3. 地区別の人口構造の変化

次に、周南市が区分している各地区<sup>3)</sup>について、その人口変化を考えてみる。周南市には以下のような地区が存在する。

・旧徳山市街地

周陽地区、遠石地区、岐山地区、関門地区、中央地区、今宿地区

・旧徳山周辺部

櫛浜地区、鼓南地区、久米地区、菊川地区、夜市地区、戸田地区、湯野地区、向道地区、長穂地区、須々万地区、中須地区、須金地区、大津島地区

・旧新南陽

富田地区、福川地区、和田地区

・旧熊毛

大字八代地区、大字清尾地区、大字樋口地区、大字原地区、大字呼坂地区、大字奥関屋地区、大字大河内地区、大字中村地区、大字安田地区、大字小松原地区、新清光台地区、清光台町地区<sup>4)</sup>

・旧鹿野

大字大潮地区、大字鹿野上地区、大字鹿野中地区、大字鹿野下地区、大字須万地区、大字金峰地区、大字巢山地区

---

3) これ以外の地区区分も存在するようであるが、ここでは、住民基本台帳における区分を用いることにする。

4) 新清光台地区、清光台町地区は住居表示の実施により、それぞれ大字中村地区、大字大河内地区から近年分離したものであり、本稿の分析においては旧地区に含めて分析している。



表1 30歳代後半コーホートの人口増減数トップ5（地区別）

増加数トップ5（単位：人）		減少数トップ5（単位：人）	
関門地区	67	今宿地区	-101
大字呼坂地区	61	岐山地区	-95
中央地区	60	久米地区	-42
戸田地区	38	福川地区	-24
菊川地区	19	大字鹿野上地区	-21

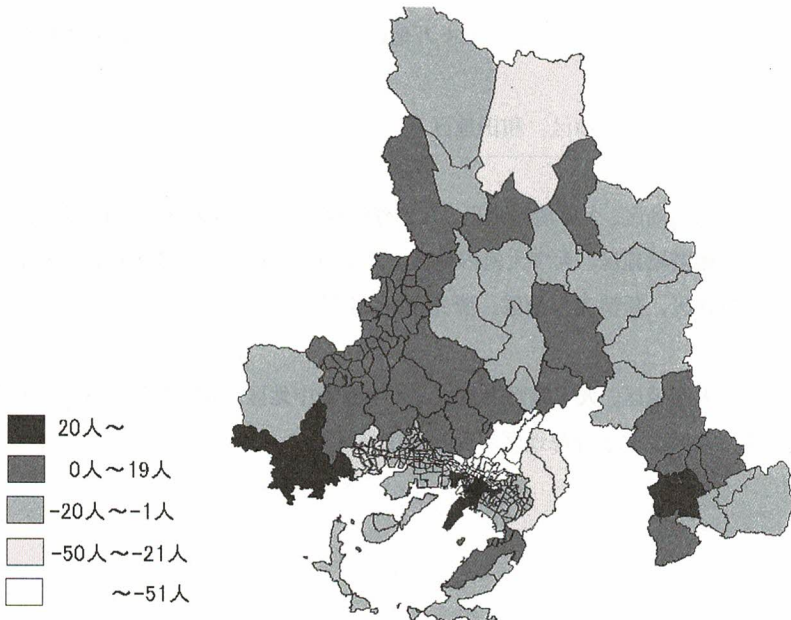


図9 30歳代後半コーホートの人口増減数（地区別）

表2 30歳代後半コーホートの人口増減数トップ5（地区別）

増加率トップ5（単位：％）		減少率トップ5（単位：％）	
大字原地区	41.2	大津島地区	-50.0
中央地区	22.1	大字大潮地区	-42.9
戸田地区	19.8	大字巢山地区	-40.0
和田地区	16.9	須金地区	-31.6
大字呼坂地区	16.8	向道地区	-26.7

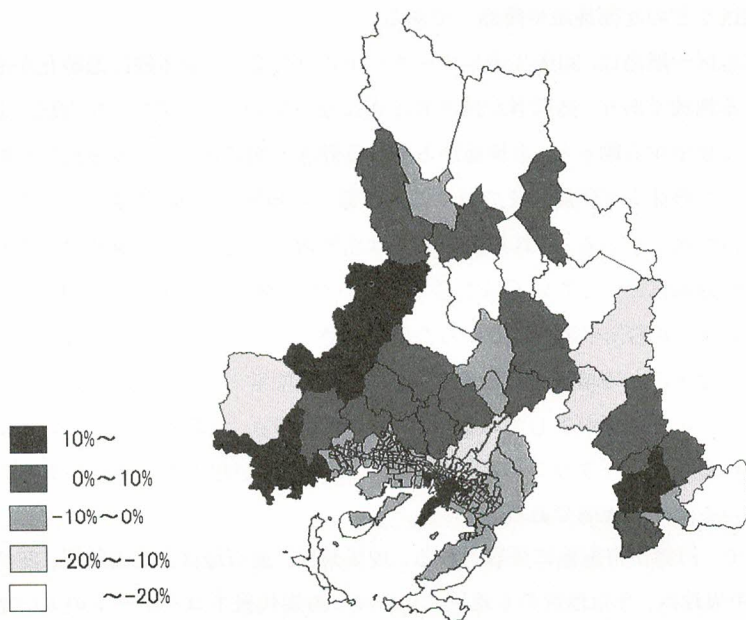


図10 30歳代後半コーホートの人口増減数（地区別）

30歳代後半のコーホートについて、地区別の人口増減数と人口増減率をみると、人口が増加しているところは、①中央地区、関門地区などの徳山中心部、②大字原地区、大字呼坂地区などの旧熊毛地域、③戸田地区、和田地区、菊川地区などの旧徳山西部・旧新南陽地域 などである。

徳山中心部には桜馬場通2丁目以外にも多くのマンションが建設された。旧熊毛地区には団地が開発されている。これらの場所において、30歳代後半コーホートの人口が増加しているが、徳山駅に近い地区に集中する動きと、徳山や新南陽の市街地から離れていく動きが見られる。

一方、人口が減少しているところは、①今宿地区、岐山地区、久米地区、福川地区などの徳山や新南陽の中心部から少し離れた地域、②大字鹿野上地区、須金地区などの北部地域や離島 である。

北部地区や離島は、30歳代後半コーホートだけでなく、全体的に過疎化が進んでいる地域であり、高齢者が残される形になっている。一方で、徳山駅に近い地区に集中する動きと、市街地から離れる動きの間であって、今宿地区や岐山地区などの徒歩で駅周辺まで行くことが難しい地域は、30歳代後半コーホートの人口が減っている。これらの地域では北部地区に比べれば、現在のところ高齢化や過疎化といった問題は生じていないが、今後人口を呼び戻す動きが生じなければ、高齢化や過疎化といった問題が生じるであろう。また、ここで見たものは地区ごとの増減であるので、より小地域で考えた場合には、高齢化や過疎化といった問題が生じているかもしれない。最近、大都市近郊においてよくいわれる「ニュータウンの高齢化」といった問題が起こる可能性があるのは、このあたりの地域である。

そこで、旧徳山市街地に分類される、周陽地区、遠石地区、岐山地区、関門地区、中央地区、今宿地区の6地区について、30歳代後半コーホートの人口増減を、町丁字単位で見えてみることにする。



#### 4. 小地域別の人口構造の変化

表3 30歳代後半コーホートの人口増減数トップ10（小地域別）

増加数トップ10（単位：人）		減少率トップ10（単位：人）	
秋月4丁目	91	扇町	-49
桜馬場通2丁目	53	下ノ井手	-47
若草町	37	瀬戸見町	-41
秋月3丁目	34	西ノ井手	-41
一番丁	34	江口3丁目	-32
東山町	23	舞車町	-27
上ノ井手	22	周陽2丁目	-23
大内町	21	遠石1丁目	-21
上御弓丁	20	江の宮町	-17
毛利町2丁目	19	中金剛山	-17

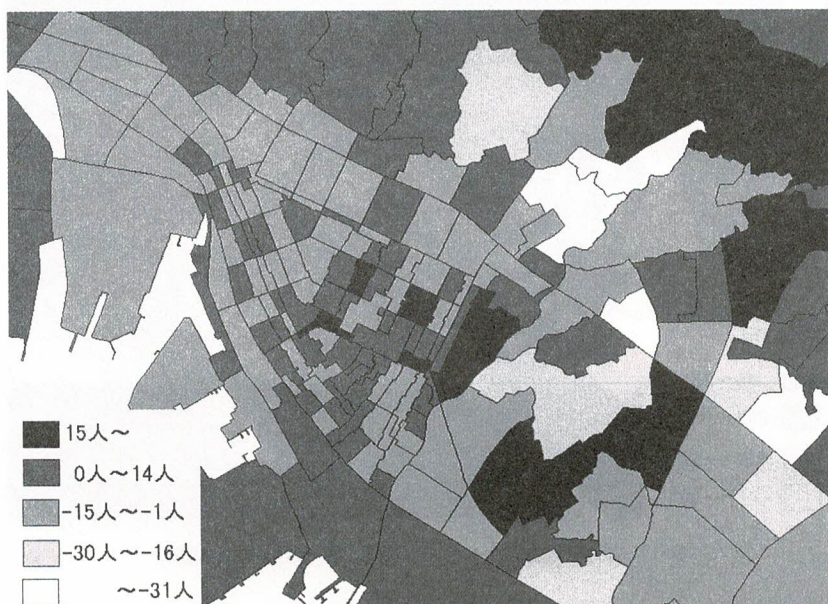


図11 30歳代後半コーホートの人口増減数（小地域別）

表4 30歳代後半コーホートの人口増減数トップ10（小地域別）

増加率トップ10（単位：％）		減少率トップ10（単位：％）	
桜馬場通2丁目	1766.7	二番町3丁目	-100.0
代々木通1丁目	1500.0	銀座1丁目	-100.0
上馬屋・下馬屋	200.0	みなみ銀座2丁目	-100.0
橋本町2丁目	175.0	御幸通2丁目	-100.0
三番町1丁目	150.0	水上	-100.0
弥生町2丁目	145.5	本町1丁目	-75.0
平和通2丁目	133.3	戎町1丁目	-75.0
秋月4丁目	101.1	今宿町1丁目	-75.0
上御弓丁	100.0	二番町2丁目	-71.4
一番丁	100.0	糺町2丁目	-66.7

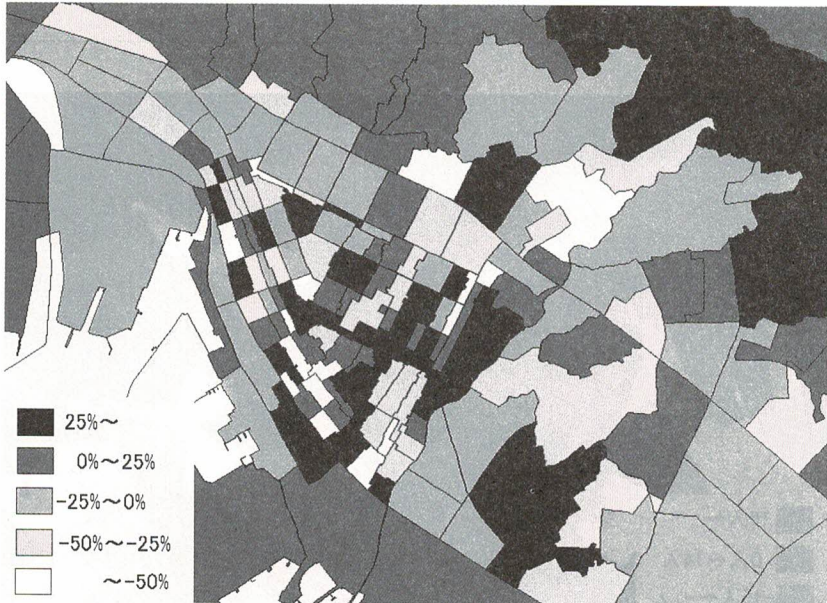


図12 30歳代後半コーホートの人口増減数（小地域別）

30歳代後半のコーホートについて、旧徳山市街地の小地域別増減数と増減率を見て、大まかにいえることは、国道2号線沿いの地域ではこの世代の人口が減少し、徳山中心部に近い地域や、少し離れた秋月などにおいて増加している。といっても、完全に徳山の中心部である銀座1丁目や、みなみ銀座2丁目などでは、この世代の人口が減少しており、中心部まで歩いていけるような場所が増加率の高い場所といえよう。

しかし、同じような徳山駅徒歩圏内でも、この世代の人口が増加しているところもあれば減少しているところもあることは見逃すことはできないであろう。この点については、人口データのみで考えるのではなく、住宅の保有状況などの他のデータからのアプローチも必要であろう。

## 5. おわりに

本稿では、30歳代後半コーホート（2008年8月末現在）に主に焦点をあて、地区別や小地域別の人口変動を記述してみた。徳山駅徒歩圏内には、この世代の人口が増加している地域がいくつかみられる一方、その周辺には、この世代の人口が減少している地域が多い。これはいわゆる「都心回帰」の現象が徳山市街地においても起こっていることのあらわれで、その周辺において「ニュータウンの高齢化」と同じような現象がおこっていないか気になるところである。この点については、今後の検討課題としていきたい。

この小地域別の人口分析について、今後小地域別の人口予測をおこなっていききたい。その際には、住宅の保有状況などの他のデータも用いる必要があると考えている。小地域別の将来人口は、自治会単位や地区単位の政策をおこなう上で、何らかのヒントとなるものであると考えている。

## 謝辞

本稿で使用した住民基本台帳人口のデータは、周南市情報公開条例により請求をおこない、開示を受けたものである。周南市役所市民課にはデータ提供に際し、ご配慮をいただきました。記して謝意を表します。

